

柱列 SX11は、A期の石組暗渠 SX10の蓋石を一部壊してつくられた掘立柱の遺構である。柱間寸法は1.7m等間。調査区内で柱根 2箇所と柱痕跡 1箇所を検出したが、塀になるのか建物になるのか不明である。

C期 石組溝 SD20の東にある石敷舗道 SF15と、小規模な石組溝 SD17、第2次調査区で検出した石敷舗道の東にある石敷 SX16がある。これらは、石組溝 SD20の東側に丘陵からの土砂がかなり堆積してから設けられたものである。

石敷舗道 SF15は石組溝から約 1 m 東にあり、幅約1.4mの間に玉石を敷きつめ、両側に見切りの玉石を並べたもの。石組溝 SD17は、丘陵からの雨水を舗道を横断して石組溝 SD20に流す施設である。

石敷 SX16は、玉石を粗く敷いたものであり、凹凸が激しい。この石敷上から 9 世紀後半から 10 世紀前半にかけての土師器が出土しており、この頃までこの石敷と石敷舗道・石組溝などが機能していたことが判明した。

3. 検出した遺物

土器・瓦・埴輪・土製品・木簡・砥石・砂岩の切石などがあるが、その大部分は石組溝 SD20から出土したものである。

木簡は14点（うち削り屑 9 点）が出土した。紀年を有するものはないが、文書木簡とみられるものが含まれている。

- □□前□白 (147) ・ (10) ・ 3 081型式
- [] □□□□□□□□

瓦は、重弧文軒平瓦が 2 点と丸・平瓦が少量あり、重弧文軒平瓦のうち 1 点は川原寺創建時のもので、飛鳥寺にも使われている。丸・平瓦の中にも飛鳥寺所用と思われるものがある。

砂岩の切石は、伝飛鳥板蓋宮や、最近では酒船石北方遺跡の石垣遺構に多数使われていることが判明したものと同質同形で、なかには斜面を削り出したものもある。石組溝 SD20の砂層から破砕したものが多数出土したほか、第2次調査区で検出した石組溝 SD20の底石には 26cm 四方の切石が使われていた。

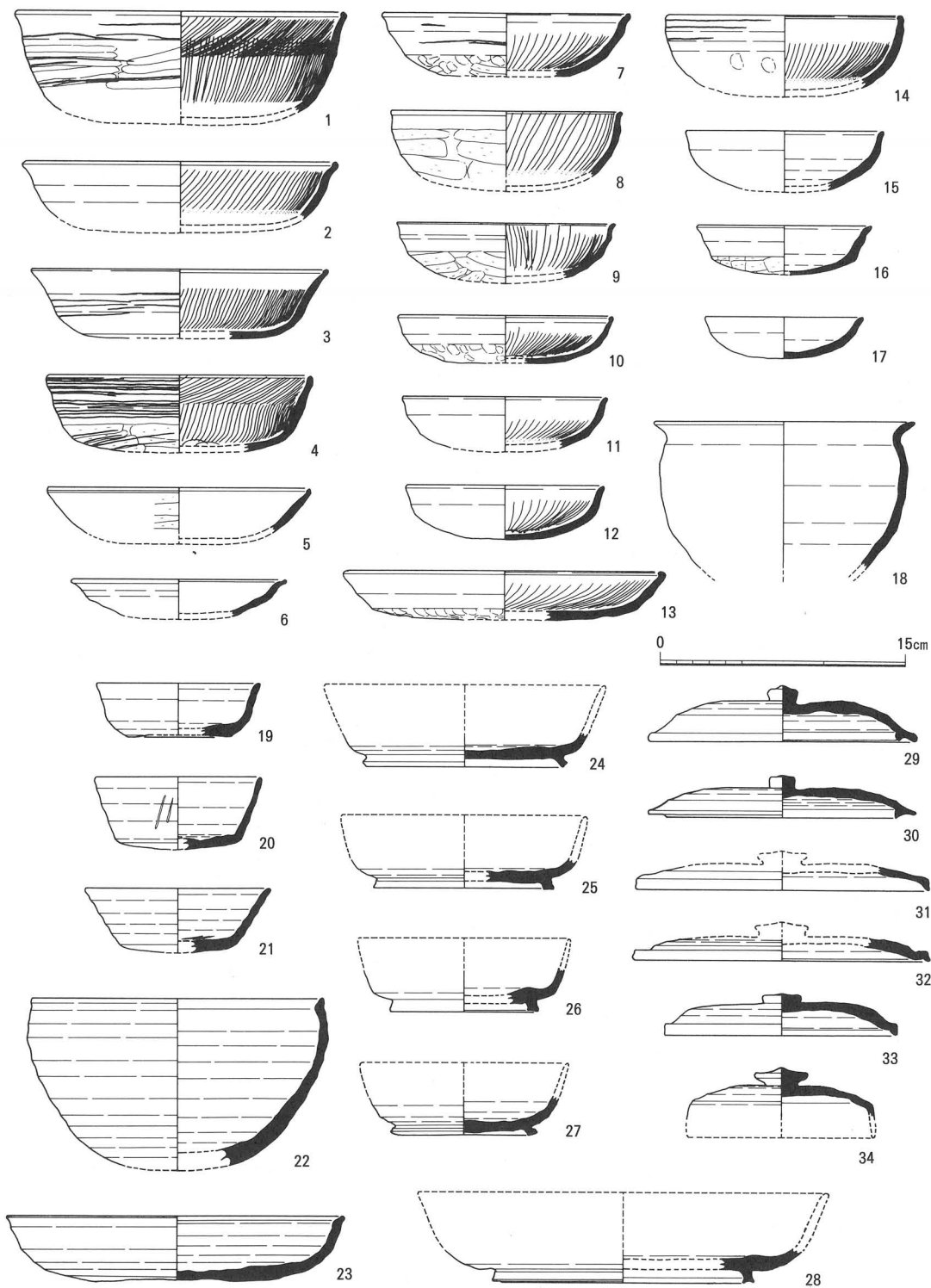


fig. 3 出土土器実測図 (6) 石敷S X26上面、(33) 土坑S K12、その他：石組溝S D20 (1 : 4)

土器・土製品 (fig. 3・4)

多量の土師器や須恵器のほか、少量の緑釉陶器・黒色土器、土馬・埴輪・轆轤羽口などが出土した。ここでは出土した土器の大半を占める石組溝 SD20出土土器を中心に報告する。SD20出土土器には、7世紀から9世紀中ごろまでの土器を含み、そのうち、7世紀後半から8世紀初めのものが主体を占める。土師器には、杯A (1~5)、杯C (7~12)、杯D (14)、杯G (15)、杯H (16)、皿A (13)、皿C (17)、甕A (18) などがある。須恵器は杯A (21)、杯B身・蓋 (24~32)、杯G (19・20)、皿A (23)、鉢A (22)、壺A蓋 (34) などがある。図示した土師器杯A (5) の年代は9世紀中頃で、それ以外は7世紀から8世紀にかけての時期のものである。この他に、8世紀の製塩土器が比較的多く出土している。SD20以外で出土した土器のうち、土師器杯A (6) は石敷 SX26上面、須恵器杯B蓋 (33) は土坑 SK12から出土している。器台 (35) は、鉢形の杯部と脚部からなり、脚部に長方形の透しを3方向から穿ち、3段透しと考えられる。(36) は折敷状の隅丸長方形を呈す須恵器の皿で、内面は丁寧にナデ調整されている。土馬 (37) は3点出土した中の1点である。土師質で左前後脚と尾の一部を欠く。8世紀中頃。(35)・(36) は7世紀の包含層、(37) はSD20から出土。

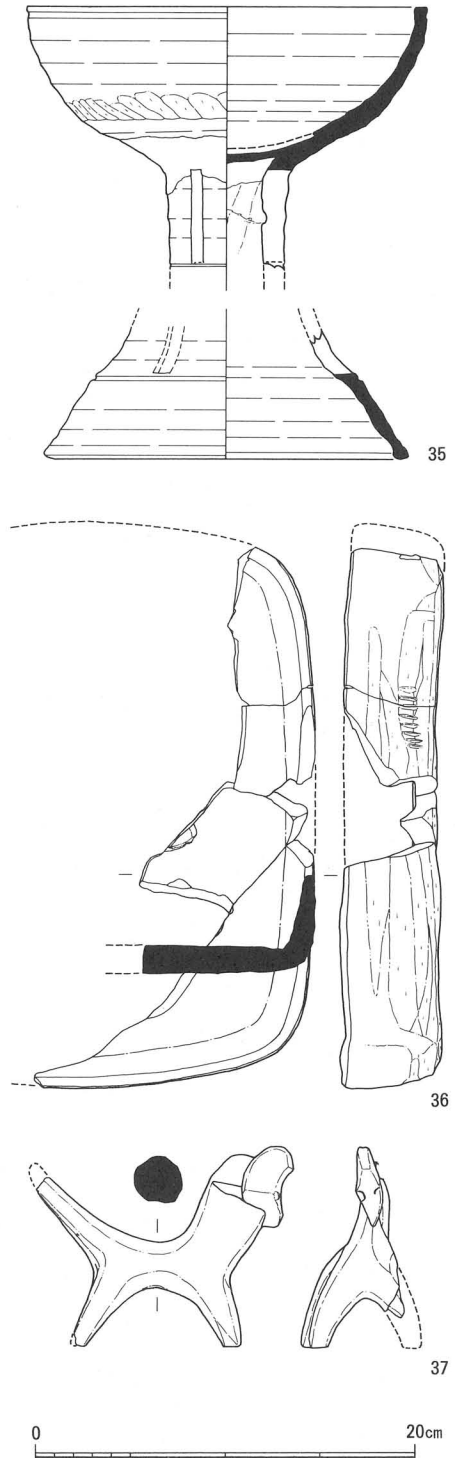


fig. 4 出土土器・土製品実測図
(35・36) 包含層、(37) 石組溝
SD20 (1:4)